

The 23rd Lung Cancer Mass Screening Seminar

新たな跳躍台となった第23回肺がん集検セミナー

松井英介^{1,2}

23rd Seminar on Screening for Lung Cancer, as a Spring-board into the New Era

Eisuke Matsui^{1,2}

¹President of the 23rd Seminar on Screening for Lung Cancer, Japan; ²Gifu Research Institute for Environmental Medicine, Japan.

(JLCC. 2009;49:38-38)

2007年11月10日(土)、東海地方で15年ぶりに開催された第23回肺がん集検セミナーは、200人を超える参加の下、活発な討論が交わされ、充実した会になりました。

午前中をフルに使ったシンポジウム①「石綿関連疾患の集団検診はどうあるべきか」は、早い時期から石綿関連疾患の研究・教育・臨床をリードしてこられた疫学者、病理学者、臨床専門医によって、今後20~30年先を見越した集検の課題が縦横に論じられました。日本の石綿輸入は1960年代から急増、74年をピークに90年代にかけて年平均20万トン以上が使用されました。当時石綿を使ってつくられたコンクリート建造物は、今後2040年ごろにかけて解体の時期を迎えます。その発症が石綿曝露40~50年後であるため、今後急増が予想される中皮腫。また石綿とタバコとの相乗効果が指摘されている肺がん。とくに、これら2つの疾患の1次予防と2次予防の重要性が浮き彫りにされました。

「子どもたちのための禁煙支援」と題したランチョンセミナーでは、小学生をも対象に加えたユニークな禁煙支援を展開してこられたDr.佐藤功が、肺がんの1次予防について楽しく語っていただきました。控え室で日本語の声だけを聴いていたDr. Henschkeが、絶えず笑い声が響く会場の雰囲気が印象的だったと感想をもらすほど、聴衆を惹きつける内容でした。

1993年からCTを使った肺がん集検を始め、世界各国との共同研究を押し進め、この分野の研究と実際をリードしてこられたDr. Claudia Henschkeは、今回の招請講演で、CT肺がん検診は、5年以上くり返すことによって、初めてその有効性を証明できると明快に論じ、参加者に深い感銘を与えました。

シンポジウム②「肺がん集検システムをどう構築するか」では、今まで意見交換の機会が少なかった異職種、保健事務職、放射線技師、細胞検査士、医師それぞれの立場からご講演いただきました。肺がん集検の精度管理については、これまでもさまざまな角度から取り上げられてきましたが、検診を取り巻く社会的・経済的背景にもメスを入れながら、検診現場各職種の力を総結集したシステムづくりについて、演者間のみならず参加者との闊達な議論がなされました。

今回のセミナーを成功に導いてくださいました、セミナー参加者、各シンポジスト、講師、司会、座長ならびに近藤丘・日本肺癌学会集団検診委員会委員長、下方薫・第48回日本肺癌学会会長に感謝申し上げます。

「肺癌」に第23回肺がん集検セミナー特集のページを割いてくださいました小林紘一編集委員長をはじめ、編集委員に深謝申し上げますとともに、本特集がひろく肺がん検診・診療の場で生かされることを、願って止みません。

¹第23回肺がん集検セミナー世話人；²岐阜環境医学研究所。